

懸賞論文優秀賞

6世紀の百済における舍利信仰 ——北東アジアの仏教受容とその伝播——

國學院大學（宗教学）

有働 智奘

要 旨

現在の韓半島における宗教・思想は古代の文化交流を基盤として形成されている。近年、韓半島における考古学の進展によって多くの古代祭祀遺構が出土し、古代の韓半島の様相が解明されてきた。しかし、韓半島の宗教・思想史の研究は統一新羅から現代までを対象とした考察が多い。儒教や仏教などは中国伝来の宗教・思想であって、紀元前から生活している韓半島の原住民によって形成されたものではない。そこで、韓半島の思想交流史を考える上で注目すべき仏教伝来を取り上げ、日本の思想形成に影響したのは韓半島独自に展開された仏教思想であることを検証した。

まず、近年発見された百済地域の考古資料を用いて、6世紀における百済の舍利信仰の展開を明確にし、北東アジアでの異文化受容の様相を考察した。特に舍利信仰については、釈尊の遺骨を崇拝するという行為は、従来の韓半島周囲の土着信仰でみられず、そこで崇拝される天地の神々には「骨」が存在しないことを指摘して、釈尊には遺骨が存在するという基礎的な仏教教学の受容過程について明確にした。

そして、6世紀の陵山里寺跡と王興寺跡の木塔跡で出土した銘文から当時の百済仏教思想を検討し、「菩提寺的寺院」の建立は古代朝鮮における独特な仏教信仰の形態であると述べた。さらに、仏教浸透の展開を検討し、百済における舍利信仰の伝来は、5世紀末から6世紀初頭と考えられ、中国より多様な仏教教学を受容し、百済独自に展開していたことを明らかにした。

このように6世紀における百済では、急速に仏教受容を推進するため、従来の土着信仰との融合に力を注いでいた。その6世紀の百済仏教思想が日本へ伝来し、日本の神仏習合思想に影響を与えていくことを明確にした。

はじめに

6世紀における百済研究は、急速な考古学成果によって進展がみられる。例えば、1971年の武寧王陵発見を契機として、1993年には、陵山里寺跡遺跡から金銅大香炉など多くの遺物が発見された。その

※ 論者は現在、国學院大學大学院文学研究科神道学宗教学専攻博士後期課程に在学している。